

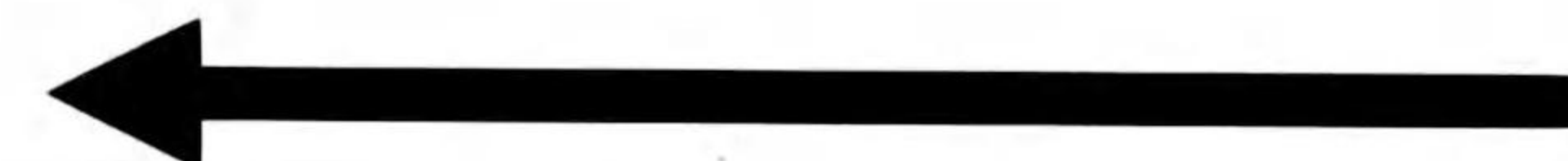
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

法隆寺大鏡

第三卷



始



本集挿圖配列順は、御物舍利殿障子繪を先にして現在の舍利殿障子繪を後に致すべく命置候所製本の障子繪の同一なる爲に混つて之を前後致候間此段御ことばり申上候

法隆寺大鏡第卅一集挿圖解説

第一、御物 黒漆螺鈿鳳凰紋唐櫃蓋見返

此唐櫃の説明は、既に第卅集に掲載し、蓋の見返も従うて之を明かにしたれば、今は挿圖の足らざりしを補ふのみにて、再び累説を試みず、

第二、御物 舍利殿障子繪 二曲屏六隻

各高四尺九寸一分 潤三尺八寸三分

舍利殿は順徳院の御宇承久元年二月より再營して、明くる二年二月、始ど期年を費し、勝月上人慶政が祈願に依りて成れる建築なり、其後貞治四年五月、中央に黒漆宮殿を設け、佛舍利を其東戸に、靈寶を西戸に納むるの装置とし、正面には即ち承久改造より二年を経て、同四年三月法眼尊智が繪ける太子勝鬘經講讀の御影を貼り、其後壁には傳へて金剛筆と稱せらるれども、又尊智が作と認めらるゝ蓮花に白雲の圓を装せり、當時中央宮殿の左右なる東西の柱間には、如何なる装置ありしや、今實況を證するの資料を有せざれども、是より多少の年所を経て、東西併せて六間の障子は絹本着色の繪畫を以て裝飾せらるゝに至り、御物となつて保存せらるゝ二曲屏六隻は即ち後世傷損の甚だしき修理に堪へざるを以て、剝き取りて其様式を改めたるものなり、其同様東の三間六枚の障子、即二曲屏三隻は史記に所謂商山の四皓、召されて漢宮に抵るの圖にして、其一隻は山岳峻嶒、水波沈洋、欄閣巖角に隱見し、水榭波に浮ぶ、四皓相集り

て雪景を賞しつゝ、圍碁を闘はすの圖を寫す、即是れ商山隱遁自適の光景なり、次の一隻は四皓愈商山を出て、先づ江水を渡りて長安に向はんとする圖なり、二老馬に騎して行手を急ぎ、一老扶けられて正に船を下らんとす、第三隻は即ち漢宮を寫し、先驅の一老近く馬を進め來り、都人樓より指示して之を眺むる様あり、三隻各其光景に變化を興へつゝ、四皓をして自ら商山より漢宮に引寄せしむ西の間六枚の障子は、周の文王呂尚を渭水の濱より聘し、車を同うして其宮に歸るの圖にして、第一隻は呂尚渭水に臨める水亭の縁に出で、綸を垂れ、文王遙に下りて拱筭し頭を驚ふして出處を乞ふ所圓の下段には呂尚既に舊廬に詣り上るに赴かんとする所あり、警蹕の人馬肅々として並び進む、第二隻は呂尚文王と對坐して車中に在り、巨象其轡を曳く、琴鼓笙笛を手にせる樂隊其後に隨ひ、鼓樂の響き君臣相得るの慶を奏しつゝ、漢宮を過ぎて進む所を寫す、第三隻は周の宮殿の圖なり、先驅また徐に進み來りて之に入らんとす、一は賢臣を得て國祚を永遠に固め、一は君臣相會て興國の基を肇む、此千古の美談は夙に支那史籍の將來に由りて我國に傳へられたりと雖も、是を畫圖として徴すべきは、繪畫時代以前に在りては、當に此圖を以て嚆矢と推さざるを得ず、繪畫時代の宮殿の裝飾畫は、先づ題材を支那史料に仰ぎ、主君が常任坐臥に其圖を眺めて警戒の用と爲るべきを擇び、文王と太公望、漢帝と四皓との圖の如き、就中好箇の題材と知られしが、それ以前に在りて斯る圖様を南都の一舍利殿に見るを得るは、我國宮殿裝飾畫の淵源を尋ねるに於て、遺失すべからざる資料と云ふべし、料絹の經緯組織にして絳に類し、三

香齋善大樂在世一筆齋圖繪

香齋善大樂在世一筆齋圖繪... 此圖繪は、香齋善大樂の筆によるもので、その筆致は、

此圖繪は、香齋善大樂の筆によるもので、その筆致は、

香齋善大樂の筆によるもので、その筆致は、

香齋善大樂の筆によるもので、その筆致は、

幅を結合せて一鋪となす、これ既に織豊時代に見るべからざるの製
なり、線は細毫を以て作れりと思ほしく、繊銳にして婉曲なる筆致
を弄せず、間一氣に曲折せしめて、筆鋒の峻烈に過ぐるの成なきに
あらず、此技巧また後の裝飾畫に現はれざる特徴たり、彩色は重厚
にして泥金兼金併用、所謂佛畫師の手法と相倚る所あり、特に樓
閣屋上に蓮花を配し、文王の幽薄中に輪寶を冠せる人物の存する如
きは、取材の本源近く佛畫に存するを思はしむ、是に由りて觀れば
作家は南都の佛畫師にして、支那史實を畫くに憑據すべき本様のあ
る無く、時世又此種畫様の流傳未だ冷ねからざるに際し、百方苦慮、
在來の手法に依りて此大圖を構成したるなり、其兵仗に純日本式の
ものを寫し、樹木に鎌倉時代の繪巻物に見るが如き一筆書の側數法
を遣り、波紋もまた並行せる彩墨二線を以て起伏の態を畫き、數條
の線を正しく列ねて蕩漾の意を表し、層波整然として一絲紊れざる
描法より成れるは、舊株によつて分毫も新意の加はれるを見ず、佛
畫師傳來の法を唯一の手段として、斯る新奇の題材を縱横に揮灑し
たる作家は抑も何人ぞ、傳へて土佐光信といふも信ずるに足らず、
思ふに足利初世、佛畫師の尙は勢力を有して前代の手法未だ全く轉
化せざる時の作に係れるならん、

第十四、第十九、舍利殿障子繪

各高五尺六寸二分 濶四尺四寸二分

前に述べたる障子繪、其色偽損して使用に堪へざるを以て、二曲屏
に改装して細封藏に收められ、更に長谷川等真をして舊様に依りて

寫さしめたるもの、今も同殿の障子として使用せらる、同様始と等
差なしと雖も、描法と配景とは自ら新作家の自由なる筆法の現は
る、を見る、等真之を畫きしこと中院良調の古今一陽集に見え、良
調は元祿享保頃の人なれば、新寫の成れる時代は徳川初期を降らざ
るべし、唯等真の名長谷川系圖に傳はらず、其年代を明かにするこ
と能はざるを遺憾とす、

1937年10月10日 星期一
 晴
 上午九时，由上海乘火车赴南京，沿途所见，颇为壮观。

南京，古称金陵，为六朝古都，历史文化名城。此次来宁，旨在考察其城市布局与古建筑。

首先参观了明城墙遗址，城墙高大雄伟，气势磅礴。城墙上的城砖，多为明代所烧，质地坚硬，色泽青灰。

接着参观了夫子庙，夫子庙是明清两朝的文庙，建筑精美，雕梁画栋。庙前的秦淮河，碧波荡漾，两岸杨柳依依。

下午，参观了中山陵，中山陵是孙中山先生的陵墓，也是现代建筑的杰作。陵墓依山而建，气势恢宏，体现了中西合璧的风格。

在南京期间，还参观了其他许多名胜古迹，如雨花台、玄武湖等。南京的历史文化底蕴深厚，令人叹为观止。

1937年10月11日 星期二
 晴
 上午，由南京乘火车赴徐州，沿途所见，皆为平原沃野，物产丰富。

徐州，古称彭越，为兵家必争之地。此次来徐，旨在考察其军事地理与历史文化。

首先参观了徐州博物馆，博物馆收藏了大量的历史文物，展示了徐州悠久的历史。

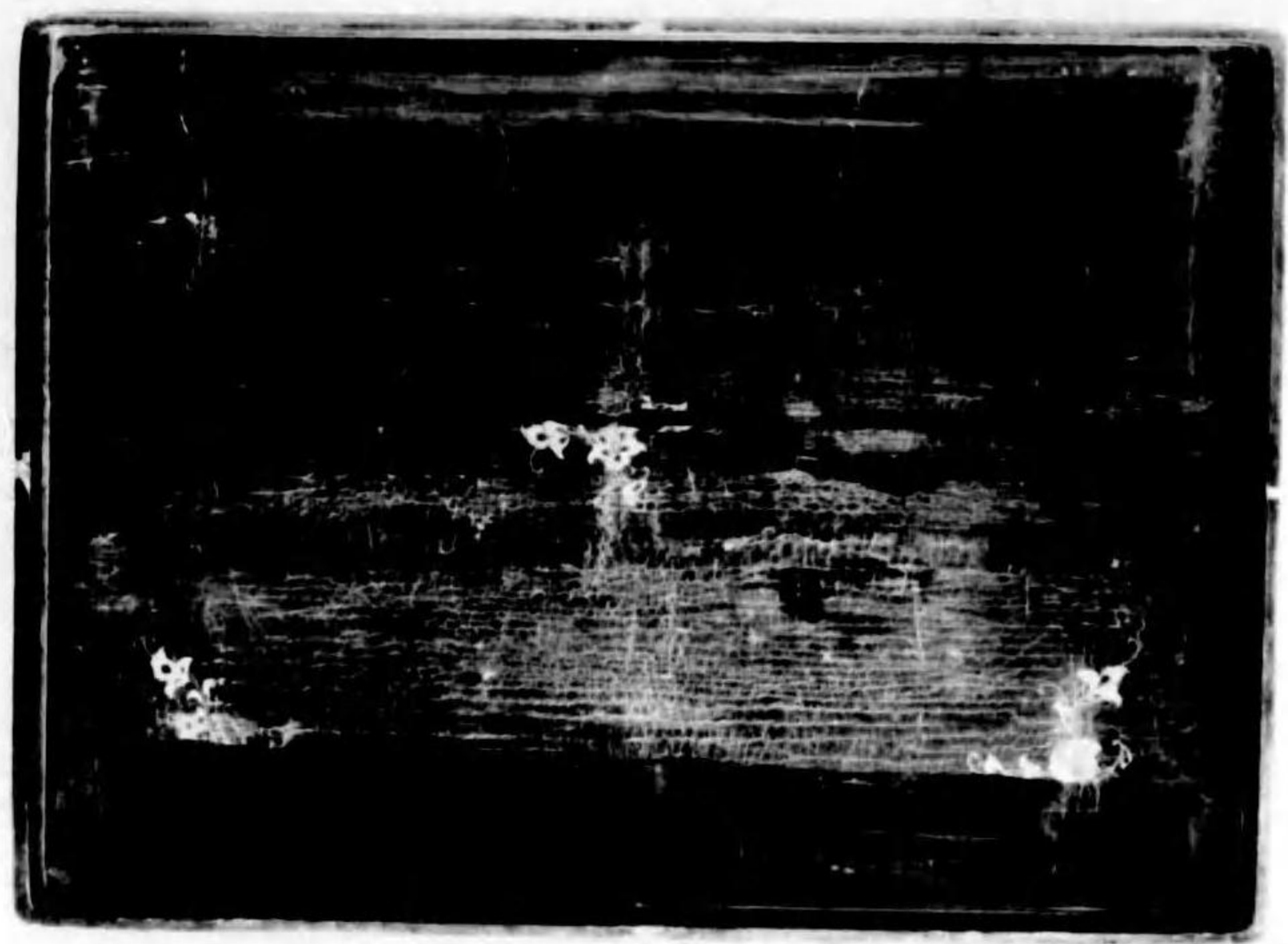
接着参观了云龙山，云龙山是徐州的名山，山上古木参天，景色宜人。山上的兴化寺，历史悠久，香火旺盛。

下午，参观了淮海战役纪念馆，纪念馆记录了淮海战役的经过，是爱国主义教育的重要基地。

在南京期间，还参观了其他许多名胜古迹，如夫子庙、中山陵等。南京的历史文化底蕴深厚，令人叹为观止。



1937年10月10日 星期一
 南京夫子庙夫子庙



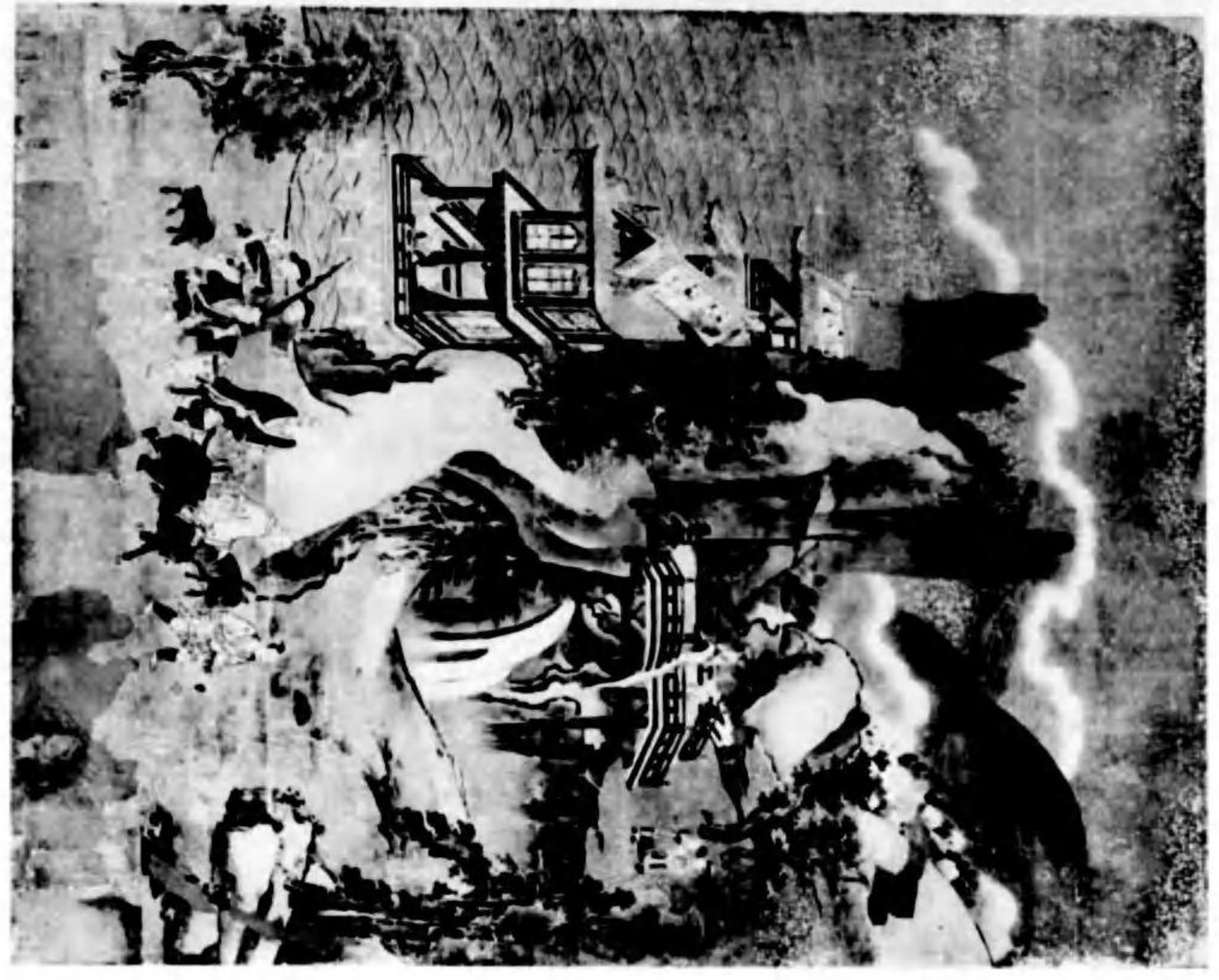
南京夫子庙夫子庙



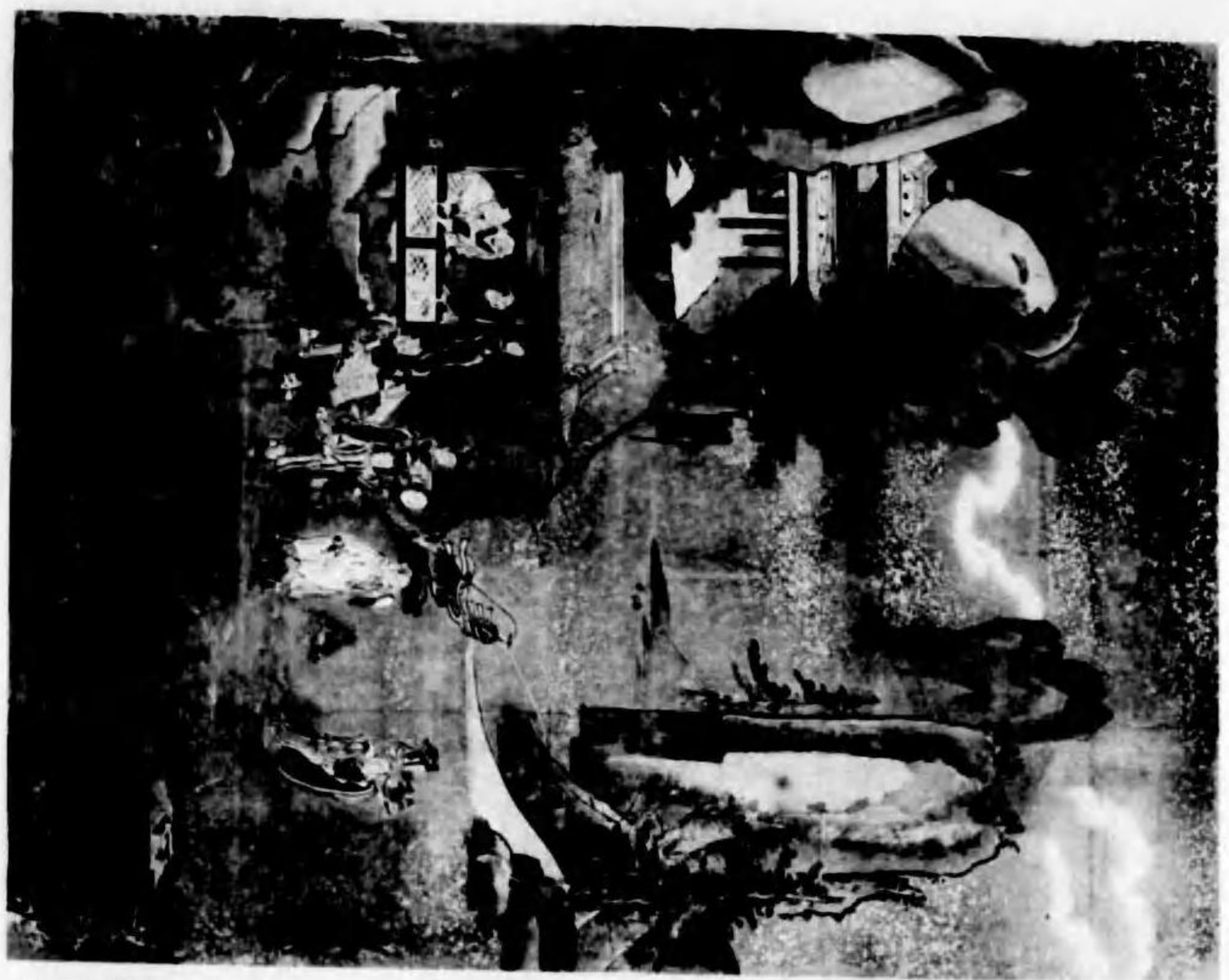
杭州西湖孤山

杭州西湖孤山

高麗 平壤 子湖 (1922)



朝鮮總督府



(三) 繪子園遊 景和介

繪子園遊 景和介



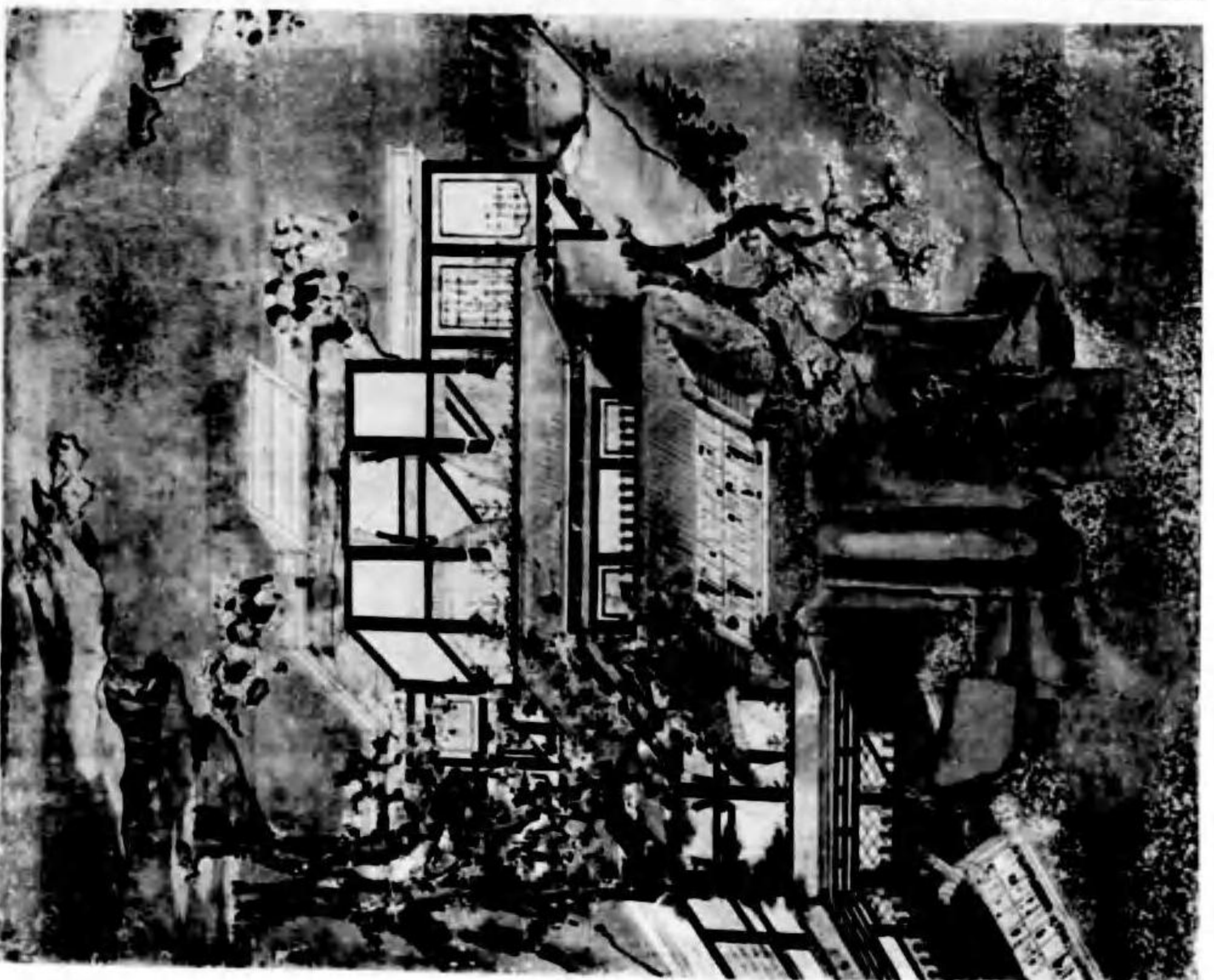
（上） 給予 阿西 亞利 尔

阿西 亞利 尔



老婦與 兒童手群 (1932)

老婦與兒童手群 (1932)



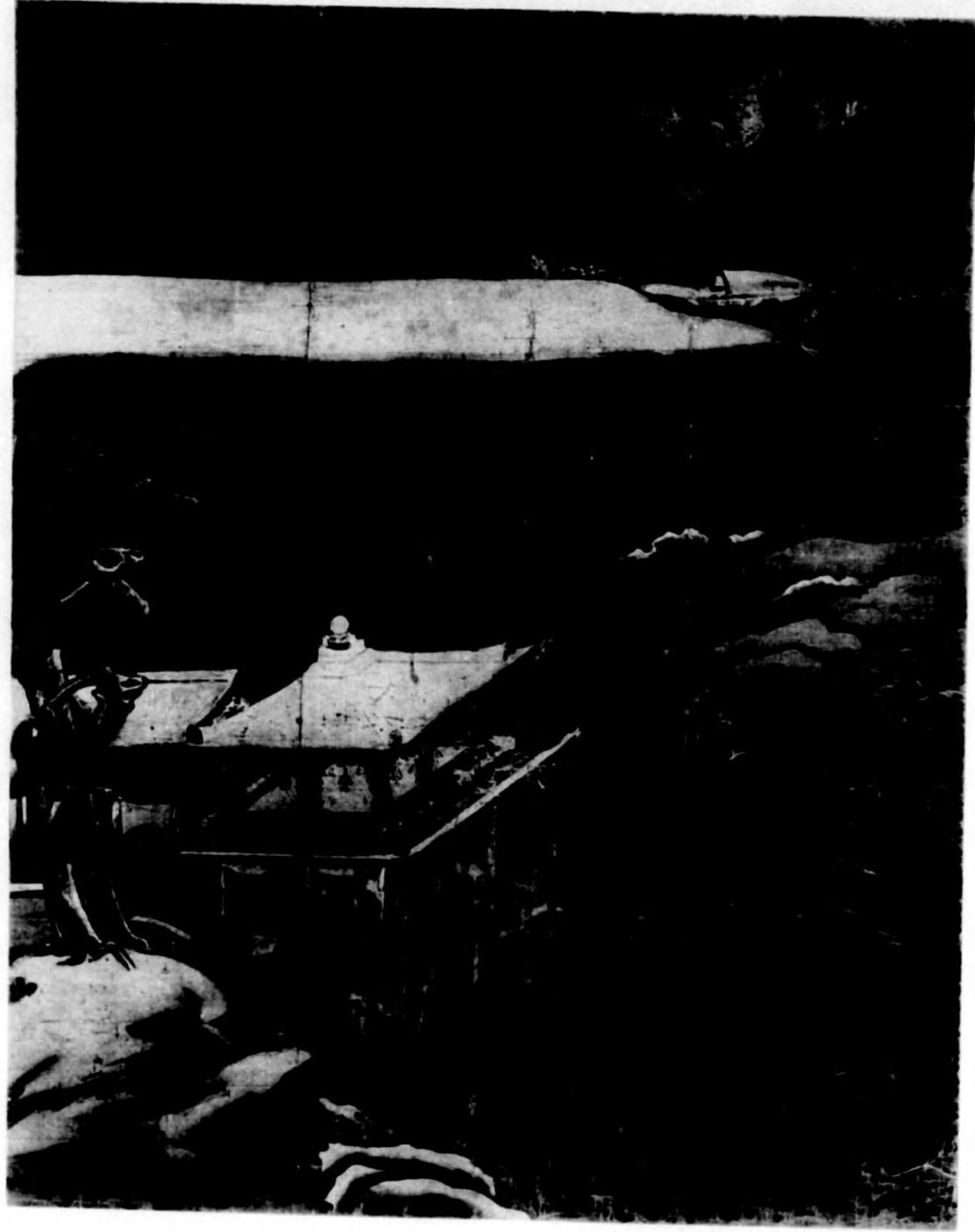
121 椅子院 藤村

藤村 椅子院



國立自然科學博物館

動物學部贈與風物



御物合利繪屏風

二四 御物合利繪屏風



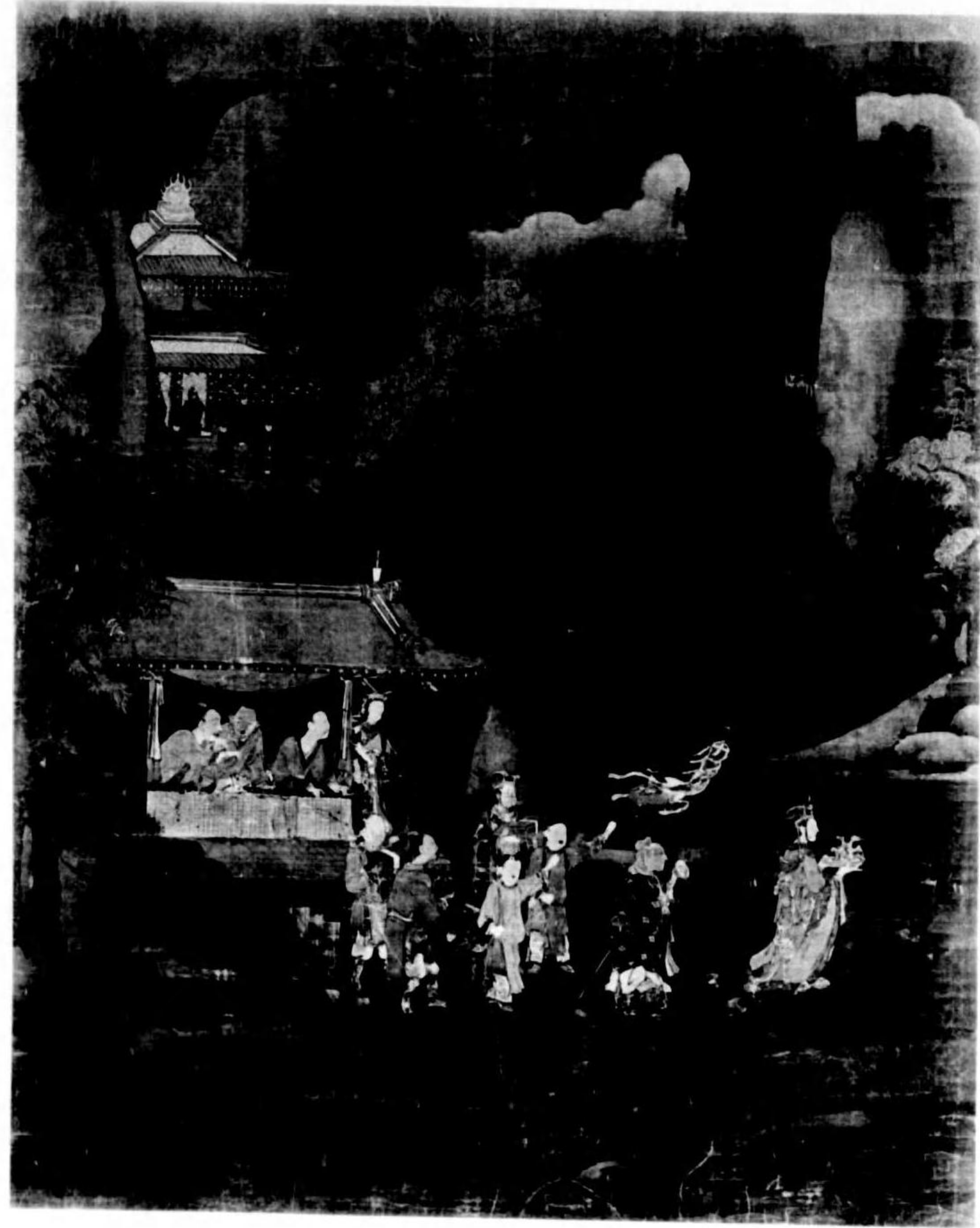
杭州西湖

西湖風景



風屏繪殿刊舍物御

御物刊殿繪屏風



高州一景

高州一景 高州一景



物印 刊 繪 風 冊 二

物印 刊 繪 風 冊 二



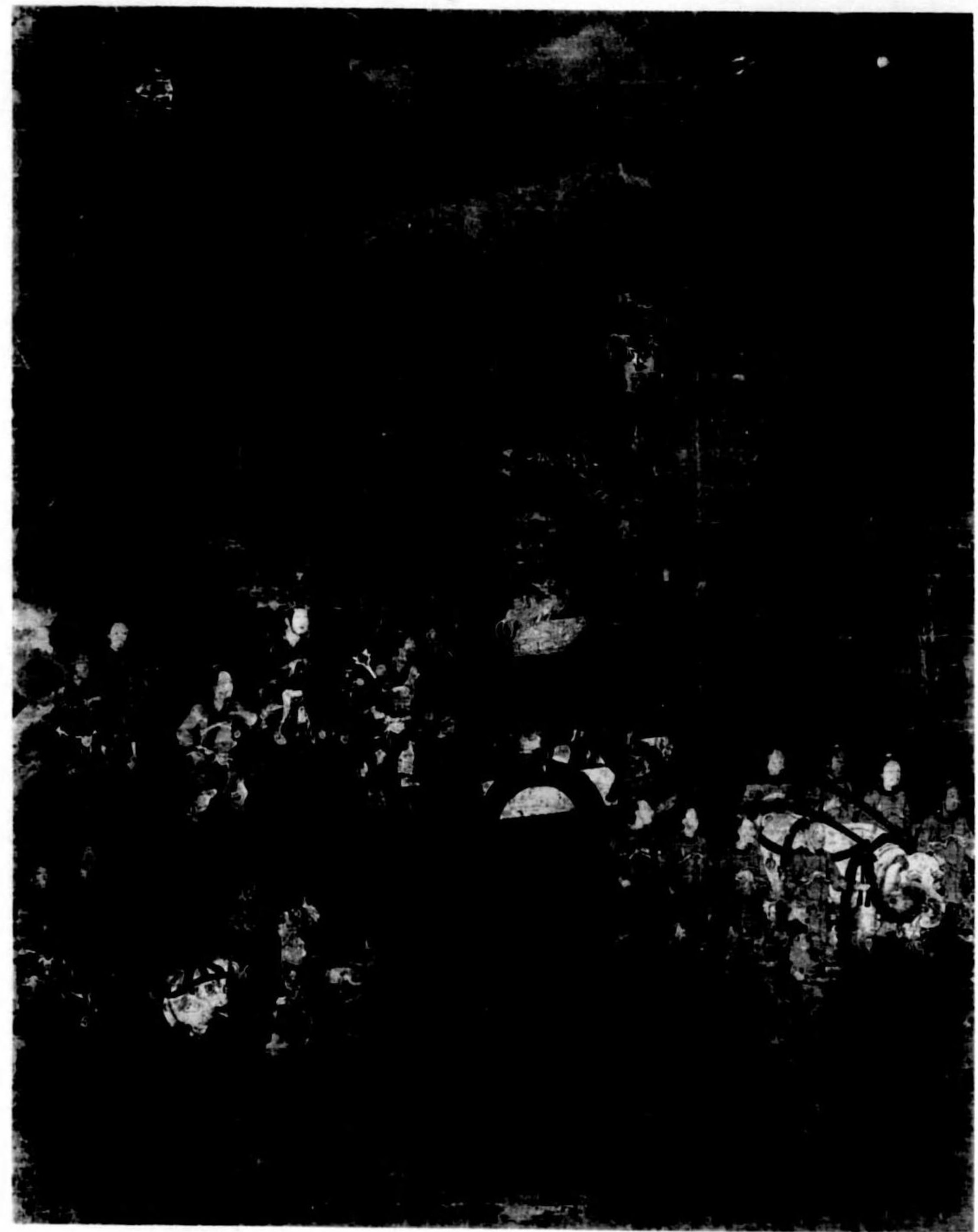
京都府立総合資料館蔵

京都府立総合資料館蔵



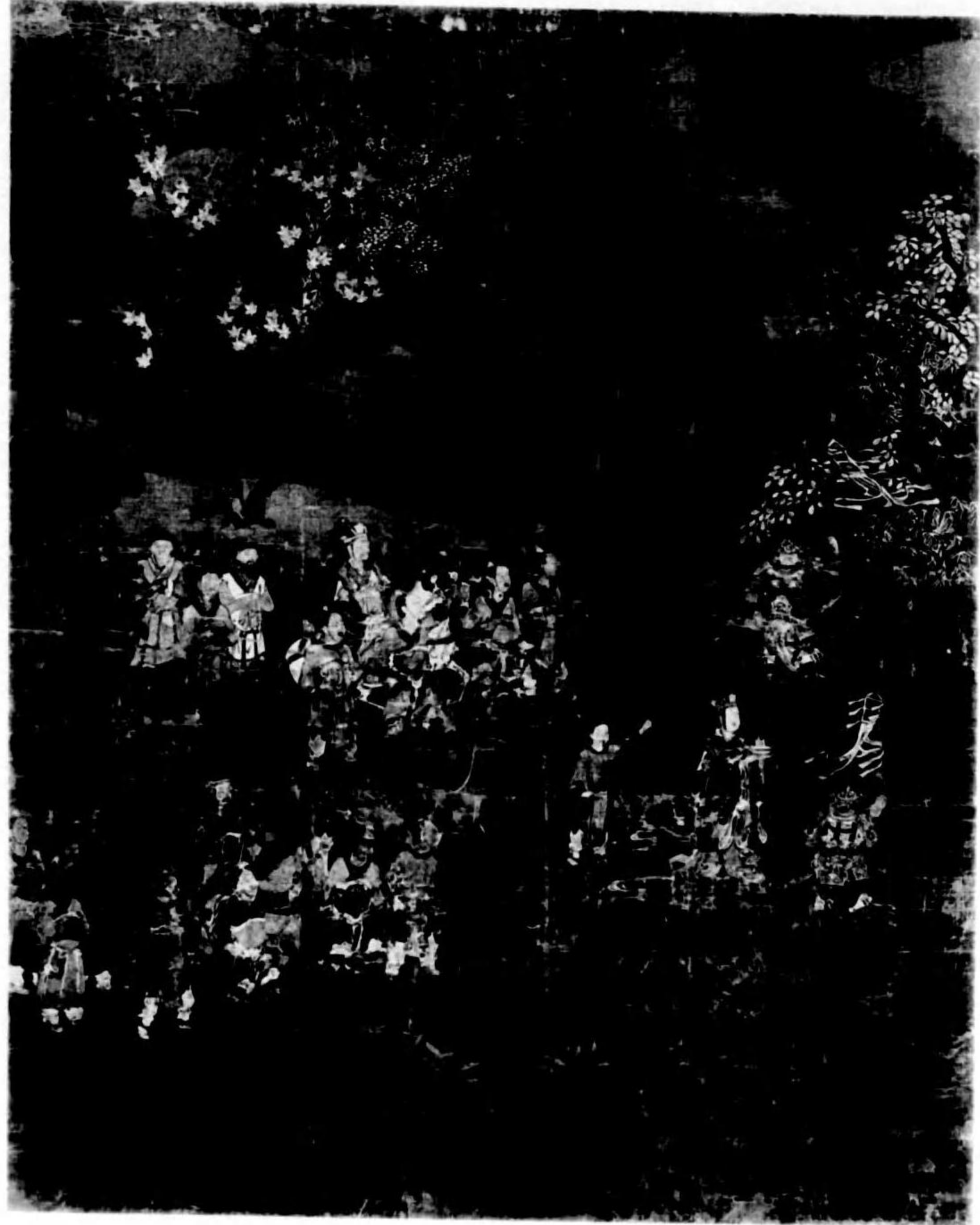
御物合殿繪屏風

御物合殿繪屏風



阿爾山圖

印物 谷利 繪屏 風



京都府立総合資料館蔵

京都府立総合資料館蔵



治州

治州



京都府京都市

二二五 風見景殿利公 物部

大正五年五月廿六日印刷
大正五年五月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地
白石村治

印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地
武田勝之助

發行所 東京市下谷區中根岸町六十八番地
墨彩堂

終

